

江戸時代、下利根川は風光明媚な景色が当時から名高いかったため、東国三社を巡拝しながら同地方の景色を楽しむという、いわば物見遊山の旅を目的とした人々が、江戸をはじめ各地からやってきました。それ

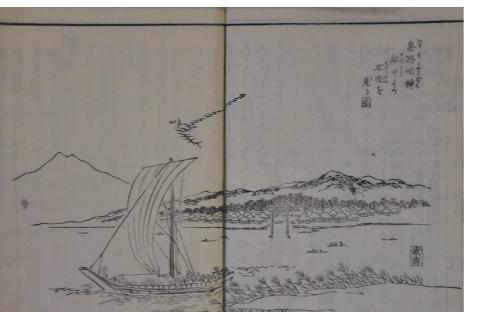
木下茶船（模型）



千葉県立中央博物館大利根分館所蔵

木下河岸から客を乗せて東国三社詣や銚子近くを往き來した船。

**息栖明神
船中より正面を見るの図**



千葉県立中央博物館大利根分館所蔵

安政2年（1855）『利根川図志』
医師赤松宗旦によって著された地誌で、利根川沿岸地域の社寺・名所・旧跡・物産・伝説が記されている。



東國二社

いきすじんじや

らの旅行者を乗せて利根川を上下したのが「木下茶船」（きおろしちゃぶね）と呼ばれる乗合船・遊覧船でした。江戸中期には1日平均12艘、年間約1万7千人余りの人々が利用するなど下利根地方は大いに賑わい息栖神社も有名になりました。



息栖神社



鹿島神宮



香取神宮

東國二社を訪れた ぶんじんぼつかく



下利根地方には世に知られた文人墨客や歴史上の有名な人々が数多く訪れています。それらの人々は、利根川を舞台とした経済的繁栄によつて財をなした商人たちにより盛んに招かれました。江戸から招かれた文人墨客らは学問の講義などをし、東国三社を詣でたりして各地に足跡を残しています。

松尾芭蕉が水郷地方を訪れたのは、貞享4年（一六七八）8月14日で、親友である鹿島根本寺の仏頂和尚の招きで鹿島の月を眺めるためでした。

幕末の動乱期に活躍した吉田松陰は、尊王攘夷運動の根拠地とされた水戸を訪ねる傍ら、潮来、鹿島方面を周遊し、息栖

神社にも詣でたことが、同人の著した「東北遊日記」から知ることができます。そのほかにも、有名な句には、「氣吹戸主（いぶきどぬし）の風寒し」という句を残しています。この神域に身をひたしていふると、身も心も洗い淨められて、何の迷いもなくなり、体が透き通つて寒くなるくらいである」という当時の息栖神社の様子が詠まれています。

原の伊能家のほか、利根川をはさんだ下総佐原には賀茂真淵の高弟である加藤千陰や村田春海、小林一茶、十返舎一九、渡辺華山、大原幽学をはじめ多くの文人墨客や歴史上の著名人が来訪しており、利根川を渡り息栖神社にも足をのばしていましたことと思われます。

※文人墨客とは、詩文や書画などの優雅で趣のある芸術を創作する人のこと。

日本三靈泉

おしおい

忍潮井



忍潮井

息栖神社は大同2年（八〇七）に現在の地に移されたと伝えられています。息栖神社の一の鳥居ぎわの両側の水底には銚子の形をした男瓶（おがめ）と土器の形をした女瓶（めがめ）が沈められています。この男瓶と女瓶から沸く水は、社前の川一帯が入海であった頃、入海の水は塩水であるにもかかわらず、この瓶の中の水は真水で味もよかつたというので男瓶女瓶の伝承は神のしわざとして尊び祀られたとともに、石を靈力あり、生命あるものとして神秘化した石神信仰の要素も見出せます。

「忍潮井」は、伊勢の明星井、山城の直井とともに日本三靈泉の一つに数えられています。

常陸國風土記

ひたちのくにふどき

常陸國風土記の香島郡にある童子女（おとめ）の松原の記述には、容姿が大変美しい年若い男女の話が記されています。

それによると、「昔、寒田郎子（さむたのいらっこ）という若者と安是媛女（あぜのいらつめ）という少女が住んでいた。二人ともそろって容姿容貌が整っていて美しく、近郷近在に光り輝いていた。お互に相手の評判を伝え聞いて、二人同じように会いたいと願うようになり、その気持ちをじっとがまんしてこらえていることができなくなってしまった。月日が経つて唄歌（かがい）一男女が歌を

詠み合つて交流すること）の際に二人は偶然出会った。二人は松の木の下に隠れてお互いの恋の心を打ち明け、夜が間もなくあけようとしていることなど、すっかり忘れてしまっていた。突如鶏が鳴き明るくなり、人に見られることを恥ずかしく思つた二人は、二本の松の木になってしまった。」

この童子女の松原の伝承は、以前神之池近くにあり幾多の変遷の後、波崎に移つたとされる手子后神社（てごさきじんじゃ）と関係があると考えられています。



手子后神社



童子女の松原公園記念碑の銅像



5 童子女の松原公園オブジェ



一の鳥居